

○四国北東部に野生するキク属 (山中二男) Tsugiwo YAMANAKA: Variation in the genus *Chrysanthemum* in northeastern Shikoku

四国東部の讃岐山脈から瀬戸内の沿岸部と島を含む一帯は、野生のキクの種類の少ないところで、今までにわかっているのは2種だけである。そのうちリュウノウギクは、どこにもあるとはいえないがわりあい普通で、讃岐山脈ぞいでは愛媛、香川、徳島の各県に見られる。また、国分台、屋島、五剣山、小豆島などの丘陵地でもまれてない。もうひとつのシマカンギクはリュウノウギクよりも生育地が少なく、しかもかなりの変異があるので、すこしくわしくしらべてみた。

シマカンギク (*Chrysanthemum indicum* L.) が多形なことはよく知られているが、この地域でも葉の大小と分裂、毛の状態、花の色などにそうとうの変化がある。ことに中央構造線から北の内帯では、一般に植物体に毛が多かったり、葉の小さい傾向のものが目につく。徳島県池田町西山や箸蔵、香川県綾上町、小豆島の内海町にはまずシマカンギクそのものと見てよいものがあるが、内海町古江には淡黄色または白い舌状花をもつ個体がまじっている。小豆島からのセトノジギクの記録は、このうちのシロシマカンギク (f. *leucanthum* Kitam.) の誤認としか考えられない。

普通のシマカンギクと区別されるものに、讃岐山脈の西端に近いところの愛媛県川之江市を基準産地とするイヨアブラギク (var. *iyoense* Kitam. in Act. Phytotax. Géobot. 8: 76, 1939) (図1) がある。これは茎の上部や葉柄に開出毛が多く、葉はやや小形で切れこみも深く、裏面に白色の毛の密生するものとして記載された。川之江では海岸近くのがけ地などに今も見られるが少なく、愛媛県ではずっと西の北条市にむしろ多い。この変種は前記のような特徴はあるが、川之江と北条の多くの個体を検討してみると変異も少なくない。また、川之江以外にも、四国東部ではイヨアブラギクの性質がもっとはっきりした個体が見られるところがある。

香川県西部では、観音寺市の稲積山中腹にイヨアブラギクとみなされるものが多い。山麓の琴弾公園近くには、毛がやや少なく舌状花の白いものがあるが、これらはまとめてイヨアブラギクとしてよいであろう。

琴平近くの高瀬町大麻山中腹のシマカンギクは

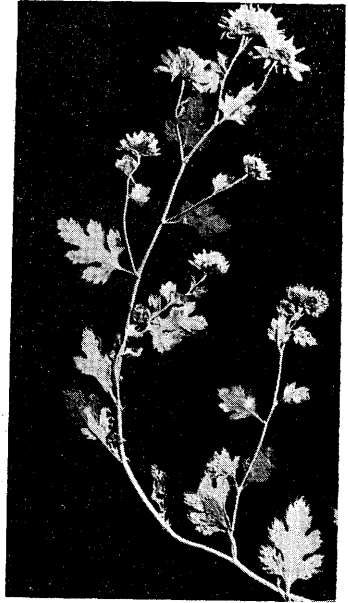


図1. イヨアブラギク (川之江市).
Chrysanthemum indicum
var. *iyoense*.

個体によって葉の形と大小および毛に変化が多く、普通のシマカンギクからイヨアブラギクの形まで見られ、標本では扱いに困るものがある。国分寺町の国分台中腹でも変異は少なくないが、葉が小さく毛の多い個体群で、はっきりしたイヨアブラギクがあり(図2)、また舌状花の白いものをまじえている。満濃町の鷹丸山近くの 454 m の山では、国分台よりもさらにイヨアブラギクの形質が明らかで(図2)、普通のシマカンギクとみなされる個体は生えていない。

徳島県では、池田町白地峰に典型的なイヨアブラギクの形がでてくるが、ここではシマカンギクと同定されるものまで、形質に変異が多い(図2)。隣接する三好町にもイヨアブラギクはある。この吉野川北岸に近い丘陵地にはリュウノウギクが多いが、ひとところイヨアブラギクがまじって生えている。葉の形はシマカンギクとほとんど異ならず、大きさは 4.0×2.8 cm になるが(図2)、毛におおわれた枝、葉柄および花柄、密毛で白くなった葉の裏面など、特徴がきわめてはっきりしていて、変異も少ない。ただ、舌状花は白いものばかりである(図3)*。これとは別に、やはり舌状花は白く、葉はノジ

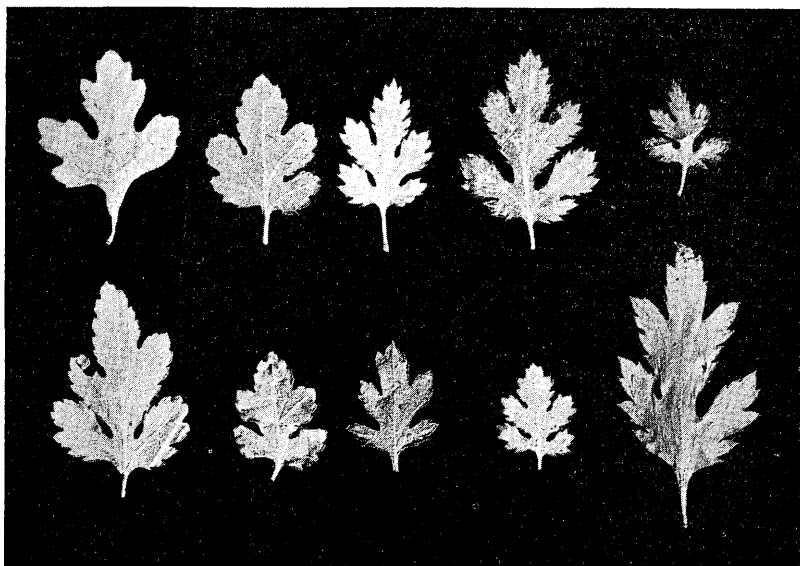


図 2. 上: 左から リュウノウギク, 中間形, シロイヨアブラギク (いずれも三好町), イヨアブラギク 2 枚 (池田町).

下: 左から イヨアブラギク (満濃町, 国分台それぞれ 2 枚), シマカンギク (伊予三島市).

* これは品種名をシロイヨアブラギクとして、次のように記載しておく。

Chrysanthemum indicum L. var. *oyoense* Kitam. f. **album** Yamanaka, f. n.
Flores radii albi.

Typus. Shikoku: Pref. Tokushima, Miyoshi (T. Yamanaka 78940, Nov. 7, 1983 in TNS).



図 3. シロイヨアブラギク (三好町). *Chrysanthemum indicum* var. *iyoense* f. *album*.

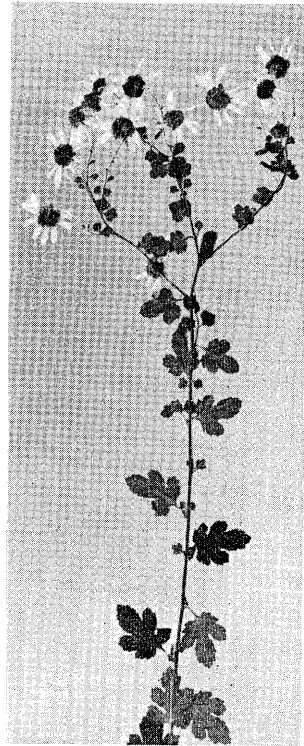


図 4. リュウノウギクとシロイヨアブラギクとの中間形 (三好町). An intermediate form between *Chrysanthemum makinoi* and *Ch. indicum* var. *iyoense* f. *album*.

ギクかシロバナハマカンギク (var. *albescens* Makino) を思わせる形で、大きさは茎の下部で $2.8-3.2 \times 2.4-2.5$ cm、毛はイヨアブラギクとおなじものが混生している (図 2, 4)。ここでは、これらの

間の変異は連続しないようであるから、これからの研究対象としても興味がある。

これらのキクの生育地についてすこしふれておく。リュウノウギクは日あたりのよい丘陵地によく生じ、アカマツの疎林に生え、またイブキシモツケ、ミシマサイコ、カワラマツバ、カワラヨモギ、イヌヨモギ、ヤマジノギクなどと混生することも多い。イヨアブラギクを含むシマカンギクもほぼおなじで、池田町や三好町のように和泉層群の砂岩や泥質岩のところにもあるから、特定の岩石との結びつきはない。しかし、イヨアブラギクが安山岩、四国東部ではときに讃岐岩の露出地に多いことは、稲積山、国分台、満濃町などの例によって明らかである。それゆえ、イヨアブラギクはこの地域ではまだほかにも見つかる可能性があり、降水量の少ない瀬戸内側で、こうした露岩地でのシマカンギクからイヨアブラギクへの分化が考えられる。(高知大学 教育学部生物学教室)